

# 日本の女子トップ選手における相対的年齢効果

## ～早生まれは不利か～

スポーツコミュニケーションゼミナール 1313043 鈴木 真優

### 1. 研究動機・研究目的

日本における野生動物の出産の時期は、えさの豊富な春または秋が一般的であるが、人の場合は技術の発達により自然界の影響を受けにくく、季節による変動は見られない。これは、厚生労働省による人口動態統計の月別出生数の比較により裏付けられる。しかしながら多くの競技において選手の生まれ月分布に偏りがあることが報告されており、日本の J リーグ・サッカー選手では早生まれ(1月から3月生まれ)の選手が少なく、代わりに遅生まれ(4月から6月生まれ)の選手が多い(内山, 1996)。日本のプロ野球選手においても、同様に早生まれが少ないことが報告されている(金島, 2013)。

これまでの研究では、成長に伴い体格差・体力差が解消され、運動能力の差も解消するとされるものが多かった。しかし、プロスポーツ選手にみられる誕生月の偏りは、幼少期の体格差・体力差によって形成された成功体験または失敗体験が累積的に影響を及ぼし、その結果として成人後にまで影響していることが要因であると考えられる。今までなされてきたこれらの研究は、男性を対象としたものが多く女性アスリートに関する研究は少ない。現在日本を含め、世界各国では多くの女性アスリートが活躍しており、同様の調査を実施することは、強化普及の成果や指導者養成に意義のあるものと考えられる。そこで本研究では、日本の女子トップ選手の誕生月に関して男性と同じ傾向がみられるかを明らかにし、またその原因を検討して、指導の一助とすることを目的とした。

### 2. 研究方法

野球(日本女子プロ野球リーグ 66 名)、サッカー(一般社団法人日本女子サッカーリーグ なでしこリーグ 1 部 208 名)、バスケットボール(WJBL バスケットボール女子日本リーグ 162 名)、バレーボール(V リーグ所属選手 144 名) ゴルフ(一般社団法人日本女子プロゴルフ協会メルセデスランキング上位 50 名)、バドミントン(バドミントン日本リーグ S リーグ女子 56 名)、ハンドボール(日本ハンドボールリーグ 95 名)、駅伝(2015 年クイーンズ駅伝出場選手 238 名)の女子トップアスリート、8 競技・計 1,026 名を対象として、それぞれの公式ホームページより選手の誕生月を調査した。1 月～3 月・4 月～6 月・7 月～9 月・10 月～12 月の 4 つのグループに分け、その四半期別誕生合計者数と割合を算出した。誕生月が分からない人、日本の教育システムを通過していない人は対象外としている。統計には SPSS Ver. 22 を使用し、 $\chi^2$  検定を用いて人口動態の分布状況を比較検討した。

### 3. 主な結果と考察

8 種目の競技における女性トップ選手の誕生月を調査した結果、男性と同様にサッカーにおいては有意差が見られた。しかし、男性では見られた野球、バレー、駅伝、バスケットボ

ールに有意差は確認されず、ハンドボール、バドミントンは男性と同様に有意差は見られなかった。また、女性にのみゴルフにおいて有意傾向が見られた。

女性スポーツにおいて男性と同様に誕生月による結果が出なかった原因として、相対的年齢効果が生じやすいとされる、「競技開始年齢が早く比較的人気スポーツで早い時期から大会等が組織されていて選手の選抜が行われている種目であり競技環境が整っているもの」という条件を満たす競技が少ないということ、また、プロの女子選手は数が少なくデータも少なくなってしまう、結果が出にくかったと考えられる。また、女性は男性に比べて二次成長期が早く訪れるため、身体的に差を感じる期間を男性より早く終えてしまうことも、男女の相対的年齢効果の差に関係している可能性があるかもしれない。

#### 4. 結論

今回の調査ではサッカーとゴルフにのみ誕生月による差がみられ、それ以外の競技では誕生月による差は確認されなかった。しかし、学校教育・また各スポーツの教育に携わる者は「早生まれ」に体格・体力の劣勢が存在することを認識し、日頃からの気配りが必要であるだろう。しかしながら、誕生月の影響については、単に教育者、指導者の気配りに頼るといことのみで解決するものではない。子供の成長度合いに合わせて、親が1年遅れの入学を選択できるアメリカなどの制度を導入することも、早生まれの影響を解消する方法のひとつであると思われる。また最近注目されている大学の部分的秋期入学制度の導入を、大学だけでなく付属の小学校、中学校、高校で導入することができれば大きな効果があるだろう。社会全体で考えたときに春季入学と秋季入学の学校が混在する状態となることで、親の側から入学の時期を選択することができるということにもなる。入学時期に選択肢のある、より多様性に富んだ社会を目指すことも早生まれ対策として有効な案の一つではないか。こういった制度を各競技の指導の現場にも導入することが大切であると考えられる。勝利することはもちろん大切なことであるが、スポーツの教育、特に幼少期の教育においてはスポーツの楽しさを教育することが求められる。勝利至上主義を振りかざしてその場での勝利を優先し、早生まれや成長が遅い児童、生徒の才能に目をつぶってしまうことは将来の競技の発展にマイナスとなることを忘れてはならない。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文執筆を進めるにあたり、指導教員の伊藤真紀助教の熱心なご指導に感謝いたします。また、アドバイスとご自身の論文をくださいました川田裕次郎助教、統計のことを一から教えてくださった大学院生の方々、そしてスポーツコミュニケーションゼミナールの7人の仲間達、この出会いのすべてがあったからこそ無事完成させることができました。本当にありがとうございました。この卒業論文を執筆したことで、私の大学生生活はたくさんの人たちに支えられているのだということあらためて感じました。4年間を思い返すと、辛いことや悲しいこともありました。それを忘れさせてくれるくらい嬉しいことや楽しいことがありました。最後になりますが、こんな幸せな大学生生活を送らせてくれた両親に感謝し、卒業後は社会人として恩返しができるよう、精一杯頑張ります。